第１回　青森市除排雪検討会議　会議概要

開催日時・場所	令和７年５月８日（木）15:00～17:00 青森市役所　本庁舎２階　庁議室
出席者	【委員】 大坂憲一委員、櫛引素夫委員、佐々木重光委員、成田幾末委員、田嶋研逸委員 【青森市】 市長　西秀記、副市長　赤坂　寛、副市長　横山　英大 都市整備部長　中井　諒介、都市整備部理事　土岐　政温 都市整備部次長　櫻田　文明 道路維持課長　葛原　積範、雪対策室長　福永　宏治
次　第	１　開会 ２　市長あいさつ ３　委員紹介 ４　座長選出 ５　案件 ・青森市除排雪検討会議について 本市の雪対策の概要　等 ６　閉会

【座長の選出】
・青森市除排雪検討会議実施要綱に基づき、市長が指名した櫛引素夫委員が座長に選任。

【事務局説明】
・除排雪の流れを動画で説明。
・配布資料を基に、本市の雪対策の概要及び近年の気象状況等について説明。

【事務局説明及び本市の雪対策に対する委員意見】

委員	かなり細かく気象のことについて、調べられていると感じました。 降るときは降る、降らないときもある、そのあたりの見極めは難しいです。 近年の日本海の海水温が非常に高い状態が続いているということが 1 つあると思います。寒気が入ってこないと、雪は降らないことになるので、寒気の流れ込みの具合が青森県付近に流れ込んできているのか、あるいは西日本の方に流れているのかによっても、違ってくるのではないかと思います。 気象台で降雪の測り方の変更があったことについて、昔は板の上に雪尺を立てて１日３回、９時と 15 時と 21 時に測り、終われば雪を払っていました。現在は、レーザーで毎時間の積雪を測り、前の測定との差を降雪量としていますので、ずっと積もっている雪と払った雪とでは、だいぶ様子が違ってきます。データの連続性を考えると、2005 年の 10 月以降、レーザーによる観測になっているので、その点について、どういう雪の降り方の特徴があるのかを考えたいと思います。 もう１つは、雪の質が変わっているのかなということに興味があります。寒い所では、ふわっとした雪が降りますので、雪は積もりやすいですが、温度が高い所で雪が降ると、水分を含むため、雪の量としては増えませんが、除雪に対しては非常に厄介な雪になってくる気もしています。 やはり地球温暖化がベースにありますので、そこのところも調べていきたいと思います。
委員	東青除排雪協会は 50 年ほど前に創設され、110 社ぐらいからのスタートでしたが、今は 57 社が加盟して、一緒になって広報活動や資格などの勉強をしています。 昔は、除雪に協力していかないと建設会社は、工事の指名も受けられないと、今では考えられない話もあったやに聞いています。それほど除雪というのは大変な事業です。 夜中に皆さんが寝ている時、朝にかけて雪を全部片付けなければならない、寄せなければなりません。今年は降り方や雪の質が違って重い。雪が降って、途中で雨が降っています。そうなると、ものすごい重さとなって、雪が重なり、倉庫や空き家などが潰れる状況でした。同じくらい雪が降っている年でも、これほど倒壊したのはないと思います。 データからも短期間にこれほど降っていることはない。温暖化です。 ヨーロッパからの暖気が上に上がって、押し出された寒気がアジアを通って日本海を通るという傾向が今年は特にあったと聞いています。 協会では、国、県、市の除排雪を対応しています。 市が除雪延長は一番長く、広島の尾道まで距離があります。国や県との除雪距離は全然違いますので、国の距離の何倍、市が請け負っているのかなど

	PR しながら、市民と一緒になって考えていかなければならないと思います。 　市民の皆さんは、自分の家の前に雪があると何をやっているのかという話になりますが、国の幹線の道路が開かないと雪を捨てることもできません。どこの会社も国、県、市など色々な幹線道路を除雪するだけの人数を持っていませんが、業務を受けなければ、市内に殆ど業者がいなくなるのではないかという現状があります。その中で、どうやって道を守っていくのか、まずは、救急搬送、救急車や消防車をまず通すことで進めていく、市民の命を守るということが大事です。 　今年の正月は、ずっと雪が降り続いたので、業者の中で正月気分になっていた人は、殆どいないと思います。 　誰が悪いとかではなく、みんなで考えて、どうしたら今後ここで生活して命を助けて、みんなで頑張れるのかということに論点を置かなければならないと思います。いつも犯人捜しをしているような形になっています。 　業者は除雪だけでは食べていけないという状況が各社でもあります。発注の仕方もありますし、どれか 1 つをやれば、解決するような簡単なことではないように感じています。 　私たちの協会では、除排雪に関するチラシ作成しており、市や町会の皆さんにお配りするなど、いろいろ広報活動も行っています。 　みんなで考えて、いい暮らしができるように、問題があったら、どうしたらいいのかをみんなで考えるのが一番の基本だと思います。
委員	我々は除雪ボランティアをしていると、市民から色々な意見を伺うことがあります。 　今日の資料や映像では、除雪、排雪の仕組みを説明していただいていますが、市民の側にすると、自分の家の周りの雪が片付いていないと、何をやっているんだとなり、そこのギャップが大きいのでは感じました。そこの間には、自助共助の関係があると思います。 　町内を見てみると共助、非常に住民同士のつながりが薄くなっている関係上、なかなか面倒なものがあると思います。町会の仕事をやっていても、若者は町会から離れ、老人の方たちは町会でやっていることに不満とか不平が多くなってきます。 　また、自助にしても先ほどから問題になっていますが、高齢者、それから一人暮らしの方が多くなっています。これも限界がある中で、色々な問題が出てきますが、対応できる課題と、対応の難しい課題を明確化することと具体化して、そこから解決策を練っていくことが必要ではないかと思います。 　市民の方の意見もありますし、また実際に除雪している方の意見を聞いたことがありますが、人が足りない、機械が足りないなどの意見がありました。 　今日の資料 41、42 ページでは、人と重機の数がそんなに変わっていないようなデータが出ています。ところが、64 ページの新聞記事では、足り

	ないとなっています。このあたりのギャップをどういうふうに理解し、対応していくかということが問題だと思います。 　いずれにしても、大きな課題がありますが、出来るところから始めて、効率的な成果を目指していければと考えています。
委員	よく簡潔にまとめられた資料と感じました。 　連合会では、市内の町会に、アンケートや聴き取りを行っています。 　実際には、先ほどのギャップがあまりにも大きく、４年前に ITS の技術を駆使して、自家用車にスマホを搭載して、道路の凸凹や積雪状況の把握を試験的に行いましたが、途中で頓挫しています。その後継としていろいろなシステムが構築されていますが、まだ事業者の対応がアンバランスと感じています。きちんとしている事業者もいますが、そうでない業者も半数近くいるように感じています。 　きちんとした形での除雪を行わずに、道路のうわべだけを撫でていき、日が照ったり、雨が降ったりすると、道路に車が入れない。一部では日中、救急車が入れずにストレッチャーを持って、そこまで行くという工区が何工区か見られました。 　今日のような資料が整理されていれば、システムを生かした形で対応できるのではないかと考えます。そうすると、昨年度のような苦情というか、市民からの問合せも少なくなるのではないかと思います。 　もう１つは、パトロールをしていますが、一部の町会ではサポーターを２名か ３ 名ずつ置いて、そこから市の方にスマホなどで情報提供するようなシステムとすることで、問合せが減るのではということも考えています。
座長	情報のギャップというあたりについて、そもそも今日配布された資料でネットなどに公表されている部分はどれくらいありますか。
事務局	今回作成している資料の多くは、毎年の行政計画である除排雪事業実施計画に記載されている内容を再構成しているものが多くあります。 　データについては、今回改めて集計したものが多く、特に気象データについては、過去の気象庁のデータを時間をかけて整理したものもあります。 　出動状況については、グーグルマップで見られるようなサービスを作っていますので、今回改めて比較のために、その時点時点で抽出して示していますので、今回初めて出てきたものです。 　除雪排雪の定義など除排雪事業実施計画で書ききれてない部分については、今回あらためて作成し示しています。
座長	今回、ヒートマップを使っていろいろ資料に出ていますが、除雪とか降雪に関するデータをデジタルデータを使って分かりやすく市民と共有できるようにしている自治体とありますか。
委員	ないと思います。
座長	青森市がこういったデータを作って、市民と共有しているとなると、全国

	のロールモデルにはなるわけです。 　北陸でも雪が降るところですけど、上越では 24 時間で 1 メートル雪降ったとか、帯広で 1 メートルとかとんでもないことがあちこちで起きています。だから、そういう作法が国内で確立されていないのかもしれません。 　気象台が発表する降雪量と、実際に雪かきしなければならない量が、随分体感的に違うと雪かきしてと思いますが、レーザーとの測り方の違いは出ているのでしょうか。
委員	気象台は気象台の敷地内で測っていますので、そこから少しずれると風の強さも違ったり、温度も違ったりとか、降り方もそれぞれあると思います。 　あとは風で吹き溜まったりするところもありますので、気象台の予報がそのまま、自分のところの積雪状況とイコールとはならない場合も結構あるのではないかと思います。
座長	気象台のデータは、それなりに参考にはなると思いますが、それを当てにして除雪するわけにいかないものでしょか。
委員	戸山とか山に近い所は、ここより降っていますし、降り方が変わっています。普通であれば、西の海の方から岩木山とか大釈迦にぶつかってとなりますが、今年は北の方から降っていて、横でなくて上から降っているので、板柳とかの向こうのリンゴの木の折れ方が全然違います。 　我々、除雪を担当している人も、どのラインに合わせて機械を備えればいいのか、今年は青森市の除排雪費用が 74 億ぐらいかかったわけですけども、降り方も違うわけで、発注者も大変だと思います。 　新潟なども一晩に１メートルとか今まで考えられないくらいに、気候がどんどん変わっているので、気象に対する災害の対応の考え方を変えていかないと、これから立ち行きがならないと思います。 　市でもこれだけ長い距離を持っているわけなので、非常に大変な立ち位置だと思います。少しやればお金はかかる。これから除雪を１人当たりいくら徴収するような時代も、今後予算が膨らんでいけば、やらざるを得ない時期が来るかもしれません。 　皆さんのご協力を得て、いろいろなところに雪を盛る場所、先ほど空き家の話がありましたので、そういう場所も綺麗にして、雪を捨てる場所を増やせればと思います。 　朝早くから雪かきしているおじいちゃん、おばあちゃんが、捨て場所に行くと、だんだん雪が盛り上がっていって、片付けられなくなります。造道とか、下水の処理水を使ったところは、グレーチング蓋開けて捨てると、みんなその場で片付いていきます。 そうすると、一生懸命除雪して、やりがいになる。そこを子供たちがありがとうっていうとまた、明日も頑張ろうとなります。 　昔の貯水槽を少しグレードアップして、次の日に雪を入れるような状況に

	するよか、もう少し考え方を変えて行けば、やり方によっては市民のやりがい、市民の力を借りるというのは、そういうことなのではないのかなと思っています。 　業者も寝ずに本当に頑張っています。その辺も配慮して、町会の皆さんも本当に一生懸命頑張っています。これをどうやって、みんなに分かっていただけるのか、わかる方法はないのかという辺りから考えたら、除雪は楽しい、やりがいになるまでいけることが、会議の意義かと思っています。
座長	誰もが見たことがない雪の降り方が始まっていて、雪の質も青森では考えられない、かつ青森大学ある幸畑では雪が深いと言われていますけど、広い青森市内で雪の降り方がバラバラとなると、逃げるわけじゃないですけれども、本当に体験したことがない事態にどう向き合っていくのかとなります。 　技術的な話はこれから先、詰めていくにしても、まずは本当にいい意味で市民が励まし合える仕組み、そういうものが必要だという発想があってもいいと思います。 　それで雪が降らなくなるわけではないので、解決という話にならないにしても、励まし合う感覚、発想を、いろいろな仕組みとして作っていかなければと思いました。
委員	最終的にこれだけ雪が降ってしまえば、災害対策本部を作っていますが、そういう場合は、学校の校庭も１つの雪捨て場所という形で検討するなど、今まで考えてないことも１つずつ検討していくことが、とても大事ではないかと思います。 　ダンプの数が少ない、回数を稼ぐためには近場に捨て場所を確保するなど、国も県も市も検討する必要があるのではないかと思います。 　ただ、今は近場で民家がない所はありません。今までは、雪捨て場の条件の中に民家があるとだめという話になっています。それは、除雪車から雪を下すときにあおりの大きな音がするということです。 　災害時には、その音は市民にもご協力をいただくことをやっていければ、まだまだ捨て場所があると思います。そうすると、ダンプの数が少なくても、すぐ対応できるという形になります。 　あまりにも捨てる場所がなくて、海まで捨てるとなると１日５回やれるのが３回で終わるとか、どんどん悪循環になったので、ものすごい市民の皆さんには、本当にご苦労をさせてしまったということが今回の一因にもなっていると思います。
座長	学校の校庭っていう話は出てきましたけど、そうなると、教育委員会の管轄だと思いますが、市長部局と教育委員会ではいろんな意見交換とかできる仕組みはあるのですか。
事務局	今回のように豪雪、災害ということになりますと、近くの雪捨て場、市民の雪寄せ場は拡充しないといけないということで、そこは都市整備部と教育

	委員会事務局と連携した上で、可能な限りその学校敷地の開放を行っています。
座長	もっと分かりやすい形で、広がっていくといいのかなと思います。 一人暮らしの方、高齢者の方、個別に見ると、この辺の地区は一人暮らしが多いとか、あるいは高齢者が多いとか、例えば除排雪に役立つような紐付き方とか、割と短いスパンで、情報を共有する仕組みとかは作れるものでしょうか。
委員	高齢者の方でも一人暮らしの方でも、自分の家の敷地とか玄関の除雪ができない。それによって、あの人は一人暮らしだけれども、自分で除雪はできるけれども、それができなくなって、そうなってくると、町会としてもここの町会でどれぐらいの人は、そういう高齢者とか、一人暮らしに該当するというのはわかります。 もう１つ、自分で雪片づけをする時に雪捨て場があれば、結構みんな片付けています。雪片付けは、やった後が目に見えますので、やったという気持ちになります。 自助と言えばいいのか、自分のところを自分で片付ける、自分の家のまわりの雪を片付ける。片付けられる条件をある程度整備すれば、やってくれると思います。 要するに、雪捨て場もですが、流雪溝とか排雪溝とかがあれば、皆さん一生懸命に雪は片付けてくれると思います。それが無いとどうしようかとなり、除雪ボランティアに来ますが、正直なところ雪捨て場がない所の除雪はお断りすることもあります。 やはり自分の所は自分でやるという励まし合いもですが、できる環境を少しでも整備してもらえればできると思っています。
委員	雪の降り始めは皆さん片づけます。ところが、だんだん積み重なって、積み重ねきれなくなると、道路に出してみたりとか、そのままにしたりとかなってきます。
座長	高齢者の雪捨て問題が独立してあるのではなくて、普段から高齢者の方、一人暮らしの方をどう見守るか。それが冬になったら、どうバージョンアップするかということです。
委員	地域の人と人との繋がりというのは非常に薄くなっています。 昔は近所の人の名前とか様子は全部分かっていましたが、今は精々両隣や向かいの人以外はわからないです。その状況で冬になった時に初めて、そこの方の玄関に雪が積もっている。そこで初めてその方の状況が分かることがあります。ですから、冬だけでなくて、日頃から地域の中、町会の中での人のつながりは、非常に深めておく必要があると思います。 若い方は町会離れになるし、町会でやることに不満があるということで、役員の担い手も少なくなっています。同じようなことが民生委員、児童委員

	不足につながってくると思います。
座長	一番大事な話になってくると思いますが、市の中で話題になったり、実はこんなことをやった、試みていますなどということはありますか。
副市長	雪が降るときの以外のところで、生活の中の１つの困り事として除雪があるということで支援していますので、そこのところは情報を共有しながらやっています。一方で、除雪の部分は、民地の中まではなかなかいかないものですから、市民の雪寄せ場というところの部分を空き家があるとか、空き地あるとか、すでに使える学校の校庭は機械除雪の雪捨て場にはしていませんが、周辺住民の方々の雪捨て場にしています。 普段使っている学校の校庭は、春には校庭として使わなければなりませんので、できる範囲の中でどのようなことができるのかと、福祉、教育委員会、などと連携しながら、連絡しながらやっている状況です。
座長	町会によってはサポーターを任命して、連携してうまくいっているという話について、その辺のデータは行政の方から把握して、共有、発信とかしているものですか。
事務局	例えば、冬の間は町会長からのホットラインという電話番号を設けており、町会長は各町会の住民の方から状況を選べたり、自から現場を回って、気がついたところなどあれば、随時連絡をいただくような仕組みはあります。それをパトロール班に情報提供して、除排雪対策本部の中で共有した上で、現地確認する仕組みがあります。
座長	そういう仕組みがあるのと、一部にまだ限られていますけど、サポーターがいて連携している。そういう情報は、ネットには多分出回っていない。つまり、AI に聞いても答えが出てこない代表的な話かもしれないので、逆にそのような取り組みをしているところがあると聞けば、うちもやってみようかと、思うようなところ出てくるかもしれないです。
委員	全市的に、ネットワークを作っていけば、いろんな意味でよくなると思います。もう１つは、雪捨て場の問題です。これは今言ったように高齢者が雪捨て場に持っていく場合にどんどん山のようになると持っていけない。なんとかしてくれと言っても１週間２週間経っても片付けられない。そうすると道路に出す、という繰り返しになります。 町会によっては、用水路などがあるので水を若干多めに流していただいて、みんな雪を捨てると、大量に捨てたら詰まりますので、水があるところに関しては、用水路などを活用してうまくいっているところもあります。 水があまり来ないところは、捨てるだけ捨てて、解けずに山盛りになっていくということになるので、用水路の活用ということを進めていけば、それなりに高齢者に対しての負担も軽減されますし、雪片付けは楽しいという部分が出てくるのではないかと思います。 資料ではきちんと分析されているので、分析を踏まえた上で、今ある施設

	をどう生かしていくのかを考えることで、雪捨て場や置き場が１００メートル、２００メートルも行かなければないとなると、高齢者の方がそこまで行くが大変だということで、近くにどんどん捨てていく悪循環が解消されることになると思います。 　その辺も市で検討してもらえればということは、各町会の方に聞いてみると、そういう考えを持っている地域もたくさんありますので、それに合わせて検討してもらいたいと思います。
座長	今まではそのような各町会から集まってきた要望とか情報、取り組み事例は、市ときちんと共有されているのでしょうか。
事務局	町会連合会とは、年に一度、除排雪に関しての情報交換会、勉強会のようなものを開催しており、その中で、市の考えている計画に対して、地域とすれば、こういうことを重点的にやっていただきたいなどといった意見交換は行っております。
座長	意見交換は、その場での口頭でのやりとりですか。それともデータ集としてこのような傾向があるとか、このような取り組みがあるとか、これを来年度の検討材料としてファイルで提出する形になっていますか。
事務局	そこまでシステマティックではありませんけど、今の話を受けて検討の余地はあると思います。
委員	国交省では、5、6 年前から溜めない除雪ということを掲げてやっています。それは３車線を１回除雪すると結構な量になり、片付けで排雪しなければならない。上に溜めてやるよりも、溜まった時点から溜めておかなければ、また寄せられることになり、それをずいぶん前から国はやっています。 　それをやっているのは気象のデータを見て、前もって今ある雪を片付けるようにしています。全部毎回やっているわけではないですけれども、溜まってきたら予報を見て、ジャッジをしていただいています。 　これほどの長い距離を市が責任を持ってやるとなれば、気象のデータをもって、今のうちから排雪しようということが必要になるかと思いますし、昔の狭隘路線とかは道路の奥に雪を押せば空き地があった。 今は奥から出してこなければならないということで、昔の作業効率と比べれば 3 倍ぐらいかかります。奥から全部出すといっても、手前が全部片付いてないと出せないわけです。それほど住宅が建っています。区画整理事業だったら歩道から何から幅が広いところがありますが、どうしても都市計画が細いところだと、気象データを使って雪の指令もこれから考えていく時代に入っているのかなと思います。
事務局	気象データについては、中期予報、長期予報、短期２週間先のきめ細かいデータが出ていますので、我々もうまく活用できるように、昨年度は吉田産業からデータをもらっていましたので、参考にしながら今後も先のデータを踏まえた形での戦略的な除排雪体制、指令を考えていく必要があると認識し

	ています。
座長	やっぱりコミュニケーションの問題というのはすごく多いと思います。 伝わっていないこと、実はやっているけど伝わっていないから、市役所は何やっているんだみたいになってしまう。そうではなくて、本当にやることやっているんだと、伝えられなければいけないとか、あるいはそれだと伝えづらいこともあるんだろうなと感じました。 そして、もったいないお化けはどこにいるのか。結構いそうですよね、今やっていることを文字にしたり、デジタルにしたりするだけで、いろいろ工夫の余地が見えてきそうですけど、青森県はデジタルが日本でも辛いところなので、もったいないお化けはだいぶいそうなのをどうやって追い出すか、歯がゆいことですね。 誰と誰がどんな情報を共有すべきかされていないのかというところもありますし、委員と事務局のコミュニケの方式、今後の作業の進め方について出てくる都度、聞いて話してだと話が止まります。 例えばメールで委員同士がある程度話せるような、会話と会話の間をいろいろな思いを共有しながら学び合うような仕組みを作りたいと思います。 あと配布資料をどこまで公開するのか。 まだブラッシュアップの余地がありますが、これだけのデータを集めていろいろやっていること自体が市民に伝われば、少しデータ分析を手伝うとか、データを検証してみようとかとなってくると思います。青森市民がこれだけいて、関係人口を含めれば 100 万人単位の人がいるわけです。青森に住んでない人も含めて、知恵とか力を借り合う仕組みを作るためにもこの資料をどう使うかということです。 タイムライン対策、現在タイムライン防災が流行っています。明日、明後日にはこうなる見込みだから、例えば、明日出勤やめませんかと、学校だったら休校できるけど、勤め先だったら午後出社にしようとか、明日休ませるとかすることで、トラフィック自体を減らすようなことを定着させていけるのではないかとか考えられます。 今年の冬、いろいろな人と話をしましたが、一番大きなため息は、俺らは何度同じことを繰り返していると、もう 20 年も 30 年も同じことをぐるぐるぐるぐる回って、同じ議論を繰り返しているんじゃないかという、ため息が一番印象強かったです。ですので、悩み方を変えようという声になるわけです。 この思いを委員同士の皆さんと共有しつつ、勉強させていただきながら、１人でも多くの市民の方と一緒に考えていきたい。 そういう仕組みを例えば第２回、第３回会合に向けてもひょっとしたら作れるかもしれないです。
市長	まずは本日、市でまとめた資料を提供いたしまして、情報の共有化が図れ

	たものと存じます。 　そして委員の方々から、貴重なご意見やご提案をいただきました。本当にありがとうございます。 　今日いただいた意見をもとに、次の会議に向けて様々なとりまとめを行いまして、そこからさらに委員の皆様に深掘りをしていただいて、意見を頂戴したいと思っております。 　今後さらに持続可能な除排雪体制の構築というものを目指してまいりますけども、それにはやはり事業者の皆様と行政が一緒になって連携する、そして何よりも市民の皆様のご理解とご協力が非常に大事になってくると思っております。 　市民の力を借りるという、それが市民のやりがいにつながる、そういう関係性が築ける。今でもボランティアでやってくださっている方も、たくさんいらっしゃいますけれども、そういう輪がもっと広がっていくのではないかと思っております。やはり、みんなで協力し合うという気持ちを持つということが、非常に重要じゃないかなと思っていることでございます。 　今年の豪雪の際に、国交省の青森河川国道事務所の方からコメントが出されまして、もう災害なのだから不要不急の外出は控えましょうとか、それからあとは時差出勤に協力してください。できる限りリモートワークで対応してくださいといったコメントが出されていました。 　今まで青森はどんなに雪降っても、そういうコメントが出たことはなかったと思いますが、これは我々にとっては１つの気づきといいますか、そういう災害として受け止めていかなくてはいけない、それが外出を控えましょうとかにもつながっていくと思いますので、今までと考え方を変えていくということが、非常に大事ではないかと考えております。 　それが我々のこれからの時代に対応できる除排雪の体制になっていくのではないかなと思っており、この会議の進み具合を非常に期待しておりますので、今後もまた引き続きよろしくお願い申し上げます。